

北へ向かう心

——幕末の探検家・松浦武四郎と天塩川

稀

代の探検者、作家、出版者、学者、篆刻家など、さまざまな才能を持つマルチ人間、松浦武四郎。彼はどんな生い立ちで、いかにして天塩川にやって来たのだろうか。

松浦武四郎は、1818（文化15）年、伊勢国一志郡須川村（現・三重県松阪市小野江町）で苗字帯刀を許された紀州藩の郷士の家に四男として生まれた。伊勢国といえば、本居宣長を輩出した文化の香り高い土地柄。武四郎の父も本居門下で国学を修め、茶道をたしなみ、剃髪して仏門に帰依してい



松浦武四郎(1818~1888)。写真は65歳頃

たという。この父の深い愛情は、武四郎の人格形成に大きな影響を与えたとされている。

冒険心旺盛な武四郎は、16歳で故郷を離れる。「江戸、京、大坂、長崎、唐又は天竺へでも行候か」とこの時代としては桁はずれに大きな旅をたくらみ、17歳から諸国をめぐる歩いて江戸、日光、水戸から、関西、北陸、四国、中国地方、そして九州は鹿児島にまで足を伸ばす。よそ者の出入りに厳しい薩摩藩内へは僧形で潜入したという猛者である。武四郎が育った小野江は伊勢神宮への参拝客で賑わった伊勢街道の宿場の一つ。こ

の時代、庶民に許された唯一の旅がお伊勢参りであり、その大動脈の真上で育ったことと型破りの旅人ぶりは無縁ではないだろう。

そんな武四郎は、長崎に滞在中、蝦夷地に関する情報を得た。長崎には、海外に漂流し送還された漁民などの情報が集積していたのだ。ロシアが要求する交易を日本が拒絶したためロシア船が北方の漁場を荒らし回り、東北諸藩の藩士が蝦夷地警備についているという。「蝦夷地だ。蝦夷地を知り

たい」。遠く中国やインドに向かっていた心の舵を、北へと大きく切り直したのだった。

蝦夷地への旅は、28歳から41歳という人生で最も生気みなぎる期間に、6回に渡って敢行された。身長150cmに満たない小柄な体で一日60km以上を歩き、9800ものアイヌ語地名を地図に残した。調査の結果は151冊の「日誌」にまとめられ、生涯で200冊以上の著作を残した。こうした記録をもとに武四郎が撰定した地

名は、「北海道」をはじめ、11の国名（支庁名）、86の郡名に上る。

武四郎は勇敢な探検家であり緻密な記録者である以上に、ヒューマニストであった。松前藩役人や場所請負人によるアイヌ民族への非道な行為は、苛酷な労働や収奪にとどまらない。夫婦が別々の場所でも働かされ、子供を産み育てることができなくなっていることなど、人々の暮らしと個々の人物像を書き記しながら、しっかりととらえた。その一端を記した『近世

蝦夷人物誌』（幕府箱館奉行から出版不許可）の序文に「単なる娯楽読み物として扱うのはやめていただきたい」とまでただし書きをしている。

2008年、松浦武四郎記念館が収蔵する関係資料1503点が「北海道史、アイヌ民族史研究において重要」と高く評価され、国重要文化財に指定された。150年後に生きる我々は、武四郎の気骨ある眼差しを継承者となれるだろうか。

「見ざるはいはまのやむべし」 一途な探求心がとろえた天塩川

松浦武四郎記念館館長
高瀬英雄さん



旧伊勢街道に面した武四郎の生家

武四郎の故郷・三重県松阪市にある松浦武四郎記念館では、豊富な第一級資料によって武四郎の生涯がわかりやすく展示されている。館長の高瀬英雄さんは、小学校教員を定年後、武四郎の膨大な資料を携え北海道に1年間滞在。さらに3年半をかけてすべての北

海道遺産を巡ったという熱狂的北海道フリーク。天塩川はカヌーで下っている。流域で体感した武四郎の足跡について語っていただいた。

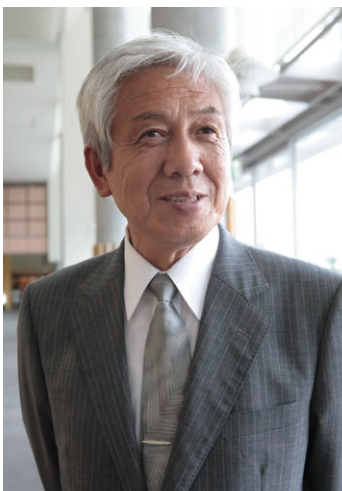
——僕は、北海道へ行く時は必ず武四郎が書いたものを持って行くようにしています。それはなぜ

か。「見ざることは志るさず」というルポルタージュ作家としての鋭い目を、現場で再確認したいからです。武四郎の書物には、喜びと涙と怒りと悲しみが刻み込まれています。

1856（安政3）年の樺太への探査の途中、武四郎は天塩川河

口の渡し場で「此川すじの事は中々尽くすべきにあらざれば他日一見の上可認しと残し置たり」と書いています。そして、翌年、石狩川流域踏査を終えた段階で、堀奉行から天塩川流域の「水脈山脈を見よ」との意向を受け、「舟を浮かべ流れに逆りて」流域に入ります。そこには未知のものへの溢れるばかりの探求心がありました。オニサツペでアエトモという人と交わした言葉から「北加伊道」の名が生まれ、これをもとにして、明治政府が明治2年9月27日に蝦夷地を北海道と命名しました。蝦夷地道名儀申上候書付に「夷人自らその国を呼びて加伊という。加伊は蓋しその地名」とあります。

名寄市盆地を見下ろす場所です。武四郎が書いた『テシオ上川え浜より新道切開方見込書』を読んだことがあります。これは箱館奉行への報告書です。「ナヨロブトよりサツテクベツ辺りのところは凡八里四方一円見障りになるものはない。平地にてここから各地へ新道を切り開いたら四通八達の土地である」「山嶺川漁十分有る。畑地肥沃でやがて誰かが遠からずこの地を切り開くであろう」。ここが開拓に適した地であり、新道開発によって大きく発展するだろうという先見の明。確かな分析力に驚いたものでした。



●高瀬英雄（たかせ ひでお）
1938年、三重県松阪市生まれ。小学校で教鞭をとりながら、松浦武四郎の研究にいそむ。退職後、夫妻で松浦武四郎を訪ねて北海道各地を旅する。天塩川流域をこよなく愛し、カヌーで下り、歩き、山へ登る。2004年より松浦武四郎記念館館長。写真は2008年7月札幌市で開催された「先住民サミット」に参加した時のもの。

『天塩日誌』『天之穂日誌五巻』は、正直言って胸糲かせるほどの

豪快な紀行ではありません。しかし流域は深い山谷に包まれ、藪と蚊の連続の苦しい旅の中で、アイヌの人たちの協力のもと、心血を注いだ貴重な記録です。それから15年後の明治5年、北海道開拓使宗谷支庁天塩詰大主典であった佐藤正克が天塩川内部開拓調査に入って記した『蘭圃日記』を読むと、武四郎に限りなく心を寄せている僕としては、不愉快な気分におそわれます。「松浦氏天塩誌二七段瀧ノ図アリ。然トモ今其何処ナルヲ知ラズ。虚筆、人ヲ欺ク那」などあるからです。明治政府の北海道政策を快く思わなかった武四郎に対して、佐藤正克は、その記録を取り上げて攻撃し、武四郎が成し得たもの大きさを否定しようとしたのではないかと憶測したり。しかし、武四郎の偉業はそんなことで曇りはしない。時代を経て、時間というふるいにかけられた今、武四郎の記録は国の重要文化財に指定されました。



松浦武四郎記念館では、蝦夷地探検のみならず、16歳からの諸国遍歴時代、52歳から就いた明治政府開拓拓官時代、そして晩年の大台ヶ原探検時代と、武四郎の多彩な実像を知ることができる

したのは誰だろう」と聞いてみたら、「この地に生まれ、育ち、亡くなったアイヌの人たちだと思ふ」と答えた後で、「そして天塩川流域の偉人といえば松浦武四郎だ！」と明言してくれました。天塩川流域には11基もの松浦武四郎碑があり、河口には武四郎像が建っています。武四郎を温かく迎え、涙させたエカシテカニが住んでいた美深町恩根内には宿泊地碑が、調査行動の中心とした名寄市には宿営推定地説明板があります。

います。天塩川名の由来となったテッシを模した池と歌碑もつくられています。武四郎の足跡は、それぞれの場所で個性を放ちながら、旅人を待ってくれます。そして僕は、流域に暮らす人々が武四郎を縦軸にしての地域連帯づくりに努力されている姿に、心から敬意を表しながら、今も輝いている松浦武四郎の姿をたずねて、天塩川流域を旅しています。

（談）

えぞ人のみそぎなしける天塩川
今宵ぞ夏のとまりをば知る
松浦武四郎

板があります。「淵有て潜龍沙魚群居に何か余の魚と異り」とチヨウザメに遭遇してその異様に仰天した美深町紋穂内には、立派なチヨウザメ館が建ち、その水槽には、武四郎の故郷・三重県で養殖されたチヨウザメの子孫が群れて



●松浦武四郎記念館
三重県松阪市小野江町383番地 TEL.0598-56-6847、
開館時間／9:30～16:30、休館日／月曜（祝日の場合は翌日）・祝日の翌日・年末年始、入館料／一般300円、6歳以上18歳以下200円

旅先の概略や名所・旧跡は、スケッチをまじえた野帳に詳しく残した。鋭い観察眼と緻密な記録者ぶりがうかがえる



天塩川へ。

魂のふるさとを求めて

特集①